

初期の律法は簡素で、法を成り立たせている精神性が分かりやすい。人を死なせてしまった場合、不測の事態だったならば無罪だが(出エジプト21:28)、怠慢が招いた結果ならば死刑(21:29)。

老若男女、誰もが同等の人権を保障されるが(21:31)、奴隷はいわばモノなので損害賠償として処理される。

「もし、牛が男奴隷あるいは女奴隷を突いて(死んだ)場合は、銀30シケルをその主人に支払い、その牛は石で打ち殺されねばならない(21:32)」。その牛は殺人で汚れ、食べてはならない(21:28)。

このようにして荒っぽい家畜は淘汰され、おとなしく従順な牛や驢馬が残っていくことになる。

奴隷の値段は銀30シケル(ペルシア貨幣)。新約時代の銀貨はそれより幾分小さく、30枚なら労働者がひと月休まず働けば稼げる。

ユダが「あの男(イエス)を引き渡したら幾らくれるか(マタイ26:15)」と聞き、祭司長たちが「銀貨30枚でどうじゃ」と応えて殺害計画は進行する(26:16)。イエスは奴隷のごとくに値踏みされたわけだが、世の最底辺に降りて来たキリストを象徴するかのような意味深い価格。

直弟子となるために出家までしたユダが、その程度の金で師を売り渡そうというのか。ユダはすぐに後悔して金を返そうとしたことからして(27:3)、金目当てではなかったろう。

権威者との対立や、民衆の熱狂支持によって危険人物になっていくイエスを、穏便な方向へ変えさせたかったのか。

十字架への道は、何びとたりとも止めることができない。

最後の晩餐の席でイエスが「あなたがたの一人がわたしを裏切ろうとしている(26:21)」と語ると、弟子の誰もが疑いをかけられぬよう「主よ、まさかわたしのことでは(26:22)」と言った。

ユダも不審がられぬよう、「先生、まさかわたしのことでは」と答え、イエスは「それはあなたの言ったことだ(26:25)」と取り合わなかった。

イエスの捕縛に際して「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった(26:56)」。ペトロはイエスについて呪いの言葉を吐きながら三度拒絶し、激しく泣いた(26:74~75)。ユダはイエスに翻意を促そうとして捕縛に協力し、後悔して自死した(27:5)。

イエスを師とし、真剣に道を求めていた弟子たちはことごとく、十字架を目前にして散らされてしまった。十字架はそれほどに恐ろしく、厳しく、謎の内にあり、銀貨30枚で売られて奴隷となったイエスだけが踏み込みうる領域であった。

若い頃、「ユダは俺だ」という恰好つけた自嘲を幾度か聞いた。私はそこまでベタに言わなかったが、若さの自意識過剰は似たようなものだった。とはいえ「ユダは俺だ」は外れてもいなくもない。

イエスに従う、のではなく、願望をイエスに押しつけるところは私たちも同じ。ペトロもまた(16:22)。

イエスを奴隷として売り渡すという、取り返しのつかないことをしたユダ。だがイエスは彼を裁くどころか、「友よ(26:50)」と呼びかけて親しげなまなざしをむけた。このとほうもない愛によって赦されながら、ユダは自らを殺すことによって悔い改めを拒んだ(27:5)。個々の命は、神の所有なのに。

「ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい(26:38)」とイエスは命じた。一時も共に目を覚ましていられない人間(26:40)。ゆえにイエスは十字架を決意する(26:42)。私たちを救わんがために。



《おまけのひとこと》

十字架のキリスト そこに近いほど苦しみは濃厚であるのか 赦しを受容できずに自死したユダ
三度の拒絶で心が崩れたペトロ 霧散した直弟子たち どうしたって復活がなければ扉は開かない